

平成 21 年 5 月 26 日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2006～2008

課題番号：18520499

研究課題名（和文） 大内氏領国の総合的研究 - その文化性の継承の視点から -

研究課題名（英文） The Synthetic Studies on the Ohuchi's Government
from the Cultural Point of View for its Continuity
to the Mohri seen in the Possessions of the Mohri Natural
History Museum

研究代表者

岸田 裕之 (KISHIDA HIROSHI)

龍谷大学・文学部・教授

研究者番号：10093585

研究成果の概要：

毛利博物館所蔵の故実書などの新出史資料の蒐集調査において大きな成果をあげ、そのうち学術的にみて貴重なものから順次翻刻作業を進め、それらについては原本校合をも行った。そして毛利元就が書写した「均馬仙翁千午將軍張良師伝一卷書」については、毛利氏関係文書と関係づけながら、戦国大名毛利氏がそれを領国支配のうえにどう活用したかという視点から解析して、学術刊行物に寄稿した（『龍谷大学論集 370 周年記念号』<2009 年 1 月 27 日受理>）。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,800,000	0	1,800,000
2007 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
総計	3,400,000	480,000	3,880,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：(1)戦国大名 (2)大内氏 (3)大内文化 (4)武家故実 (5)毛利氏

1. 研究開始当初の背景

山口県防府市の毛利博物館は、戦国大名毛利氏伝来の史資料を所蔵する。そのなかに大内氏を討滅した毛利氏に継承されたものを含めていわゆる教養物と称される巻物・冊子類がある。これらは武家故実書であるが、いまままで研究者の研究対象とされたことのない

貴重な文献である。

これらを調査・研究することによって、大内氏時代の文化性の基礎を担った書物、その利用のあり方、それを扱った家臣らについて復元的に明らかにすることができる。

こうした教養物等の読書やそれを活用した交流を基盤とした文化性は、政治権力が交

代しても継承されていく。

戦国大名が禅僧・公卿らと古典や連歌等を通じて交流を深め、高い教養をそなえていたことは明らかにされている（河合正治「吉川元長の教養」）が、故実については、室町幕府の伊勢氏・小笠原氏についての二木謙一氏、守護大名大内氏の文芸を解明するなかで同家臣飯田興秀に触れた米原正義氏の研究があるのみである。毛利氏について解析した研究は存在しない。

そうした研究状況に鑑みて、文化・意識面から戦国大名像に迫り、それが地域国家の形成や統治の意識にどのような役割を果たしたか解析する必要があると考えた。

2. 研究の目的

戦国時代に大名大内氏は山口を本拠に“大内文化”と称される特色ある文化的環境を形成した。その基盤は、九州北部に及ぶ領国内はもちろんのこと、京都、そして朝鮮・中国・琉球・ヨーロッパ等、国際社会との交流の広がり、それによる経済力にあった。

本研究では、大内氏が京都政権から相対的に自立して形成した地域国家の制度、その国家観等について、それを支えた文化性に視座をすえて総合的に明らかにすることを目的とする。

具体的には、これまで毛利家秘蔵の伝来文献であるいわゆる教養物（大内氏時代の武家故実書）と通称される卷子史料（防府毛利報公会毛利博物館所蔵）を調査・研究し、それらの翻刻、解題、解説作業を進め、当時におけるその活用のあり方とその意義について研究を行う。

弘治3年（1557）の大内氏から毛利氏への政治権力の交代のなかで、継承されたものもあれば断絶したものもあるが、大名や家臣、国人たちのこうした故実書の読書やそれを

活用した日常的な交流を通してその文化性は継承された。これらの貴重な史料は、大内氏時代に毛利氏に継承され、また大内氏の滅亡後に毛利氏に伝えられたと思われるものもある。それらの解析によって、毛利氏時代の文化性について明らかにするとともに、毛利氏時代になって付け加えられた部分を引きはがし、大内氏時代の武家固有の生活文化の様相を復原的に構成して論じたい。

3. 研究の方法

3年間にわたって行った研究の方法を年度ごとに示せば、次の通りである。

(1)18年度は、主に毛利博物館所蔵の故実書の内、整理し目録取りのうえ大内氏滅亡以前のものとして判断された大内氏家臣江口興郷筆の軍書、弓法書、馬書、室町幕府の伊勢貞順筆の仕付方書、躰方書、あるいは張良師伝兵書などの約100点の写真撮影を行った。また大内氏の基盤の一つが貿易にあったこと、とくに琉球国経由で行った明をはじめとするアジア諸国との貿易の重要性に鑑み、出航地となった南九州の油津、志布志、山川などの港津の臨地調査を行った。島津氏は大内氏渡唐船の新造を行ったり、種子島氏らとともに航路の安全を保障するなど、大内氏を援助したが、現地において地形・眺望両面におけるその良港としての実態、並びに彼らが支配した広く大きな領海の重要性を確認した。

研究の基礎となる史資料の蒐集に大きな成果をあげた一年であった。

(2)19年度は、18年度に続いて主に毛利博物館所蔵の故実書の内、大内氏家臣江口興郷筆の仕付方書（遊芸の内、狩・鶯・鷹関係）、軍事作法書、弓法書（射礼作法・笠懸・犬追物関係）、神保重胤筆の軍書、毛利隆元自筆

の馬書などの約 50 点の写真撮影を行った。また大内氏の基盤の一つが貿易にあったこと、とくに琉球国経由で行った明をはじめとするアジア諸国との貿易の重要性に鑑み、大内氏と琉球国王との交流を示す唯一の遺品で、周防国防府の鋳物師大和相秀が 1495 年に制作した那覇市首里の旧円覚寺の鐘（現在沖縄県立博物館所蔵）と関係文献資料（沖縄県立図書館架蔵）の蒐集調査を行った。

研究の基礎となる史資料の蒐集に初年度に続いてまた大きな成果をあげた一年であった。

(3)20 年度は、18 年度・19 年度に続いて毛利博物館所蔵の故実書の調査を進めるとともに、両年度に撮影済みの「均馬仙翁千午將軍張良師伝一卷書」や室町幕臣伊勢貞順筆の躰方書、大内氏家臣江口興郷筆の軍書・弓法書など、学術的にみて貴重なものについて順次翻刻作業を進め、原本との校合を行い、毛利氏関係文書と関係づけながら、その意義を解析した。そして、そのうち天文 24 年（1555）8 月に毛利元就が書写した「均馬仙翁千午將軍張良師伝一卷書」は、戦国大名毛利氏がそれを領国支配にどのように活用したかという視点から解析し、学術刊行物（『龍谷大学論集 370 周年記念号』龍谷学会 2009 年 1 月 27 日受理）に寄稿した。

4. 研究成果

毛利博物館所蔵の故実書などの新出史資料の蒐集調査において大きな成果をあげ、そのうち学術的にみて貴重なものから順次翻刻作業を進め、それらについては原本校合をも行った。そして毛利元就が書写した「均馬仙翁千午將軍張良師伝一卷書」については、毛利氏関係文書と関係づけながら、戦国大名毛利氏がそれを領国支配のうえにどう活用

したかという視点から解析して、学術刊行物に寄稿した（『龍谷大学論集 370 周年記念号』<2009 年 1 月 27 日受理>）。

その 3 年間にわたる調査・研究の実施のなかで明らかになった重要な事柄について、以下具体的に述べることにしたい。

(1)毛利博物館所蔵の故実書の内、大内義隆時代の天文 7 年（1538）に毛利隆元に宛てられた仕付方書 10 巻は室町幕臣伊勢貞順が書写したものである。

隆元が人質として山口の大内氏のもとに滞在中のことであり、当時伊勢貞順は大内義隆のもとにいたものと考えられる。

その内容は、幕府の組織や礼儀・作法等に関わる伊勢氏伝来の故実である。

(2)同じく大内義隆時代の天文 10 年以降の軍書や弓法書約 30 巻は、大内氏家臣江口興郷が書写したものである。

この江口興郷は、天文 3 年 9 月の東大寺領周防国衛領仁井令代官職請状に「江口与三左衛門尉興郷」とあること、天文 3 年 9 月 5 日や同 5 年 10 月 16 日の東大寺領学侶年貢請取状の宛先として「江口与三左衛門尉」とあることなどから、周防国衛領東仁井令代官であったことが確かめられる。

ただ、天文 17 年には東仁井令代官職に「江口五郎」が補任されているので、この頃隠居あるいは死没したものかと思われる。

なお、「江口与三左衛門尉」の初見は、享祿 3 年（1530）の松崎天満宮遷宮神馬一疋の寄進者名としてあらわれる史料である。

また永享 12 年（1440）11 月 28 日の東仁井令代官職請文に「江口十郎成綱」とあるので、東仁井令代官職は江口氏相伝の所領であったことが知られる。

（以上、三坂圭治『周防国府の研究』、『三

田尻宰判下』)

江口興郷は、同時期に安芸国衆の竹原小早川興景にも故実書を書き送っている。たとえば、9月19日に江口余三左衛門尉興郷は小早川中務少輔(興景)に宛て、「弓馬之事、興郷存知之儀不残申入候、日本国大少神祇照覧聊非私曲候、仍対貴殿於懇望之仁者、可被仰聞候、此之由可得御意候」と申し送っている(『山口県史 史料編中世3』676頁所収の毛利家文庫遠用物)。

こうした江口興郷と竹原小早川興景の交流は、また、『小早川家文書之一』521~528の江口興郷書状(小早川興景宛)によっても確かめられる。これについては、米原正義氏の指摘がある。

から考えて、江口興郷が大内氏のもとで武家故実を担当し、領国の国衆らに伝授していたことがうかがわれる。

ところで、毛利隆元山口滞留日記(『毛利家文書』397)によれば、隆元の山口滞留中の訪問先が知られる。

天文6年12月1日に山口に入った隆元は、同6日に大内義隆に対面、同19日に元服するが、その前日の18日夜の記事に「江口殿へ仰出候て、御座敷之よりのき御尋候、御懇御物かたり候」とあり、また「同廿日江口殿」「同廿九日、江口殿より御使者候、鷹一つ、頓而又河原毛御馬御礼候」などとあり、大内氏家臣のなかでも特に親しく交流していること、わざわざ出向いて「御座敷之よりのき」を問うていることが知られるので、礼儀について伝授を受けたものと思われる。

江口興郷が書写して伝授した軍書や弓法書には宛書が記されていないが、隆元の山口滞留中の行動からして、隆元の依頼によるものであると考えられる。

弓法書の内容は流鏑馬・笠懸・犬追物などに関わるものであるが、江口興郷がそれらの

奥書に書写した底本を記しているものもある。それによれば、その故実の底本が15世紀中頃の小笠原持長・同政清書写本であることが知られ、江口興郷が小笠原流故実によっていたことがうかがわれる。

(3)毛利博物館には故実書のほかにも貴重な古典がある。たとえば、毛利元就が厳島合戦の直前の天文24年8月に書写した「均馬仙翁千午將軍張良師伝一卷書」は、永正9年(1512)に文牧が書写したものを底本としているが、漢の高祖の賢臣張良の兵書と伝えられるものである。

当時この兵書は、これを所持する者の必勝不敗と治国天下を約束するという秘法として知られていた。これについては、毛利氏の関係文書を活用しながら解析することによって、毛利元就は、隆元・吉川元春・小早川隆景の三兄弟に対して、三兄弟が結束して行動すれば張良の兵書に勝るとして、家督隆元の下知に元春や隆景を従わせ、一族結束の核を強化しようとし、それが毛利氏「国家」の中枢を整備・強化する役割を果たしたと評価した。事実、毛利氏はその直後の厳島合戦(1555年10月)つづく大内氏(1557)や尼子氏(1566)との戦いに勝利し、彼ら三兄弟の結束の効果のほどは現実に証明されたのであり、そうした実績に基づいて張良の兵書はその結束意識を次第に高揚させる効果があったと考えた。

本研究は、戦国大名の領国支配において、時代や地域の文化的環境が、その領国や領域の統治にどのような効果や影響を与えているか、等々について解析することを大きな目的としている。本研究は、全国的にみても質量ともに豊富かつ貴重な内容をもつ戦国大名毛利氏関係の史資料を解析することによって、その意識構造を初めて明らかにする研

究であると考えている。早い機会に論文として順次学術刊行物で公表する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

岸田裕之、「毛利元就と「張良か一卷之書」」、『龍谷大学論集 370 周年記念号』、2009 年、査読無、投稿中

岸田裕之、「大名領国関係史料の調査と研究 写本と原文書の差異」、『国史学研究』、第 31 号、2008 年、1～51 頁、査読無

岸田裕之、「世界文化遺産・巖島の歴史と文化」、『電気設備学会誌』、第 28 巻第 1 号、2008 年、61～70 頁、査読無

岸田裕之、「境目地域の領主連合 盟主・毛利元就の国家づくり」、『龍谷史壇』、第 126 号、2007 年、1～29 頁、査読有

岸田裕之、「巖島神社の祭祀と大名権力」、『地域アカデミー』、2006winter、2006 年、47～53 頁、査読無

[図書](計1件)

岸田裕之編著、『毛利元就と地域社会』、中国新聞社、2007 年、1～276 頁。岸田裕之「境目の盟主・毛利元就の「国家」づくり」も執筆、13～46 頁

6. 研究組織

(1)研究代表者

岸田 裕之 (KISHIDA HIROSHI)

龍谷大学・文学部・教授

研究者番号：10093585